

# 多文化共生と心理臨床

## ②夏休みと子どもたち

ガヴィニオ 重利子

毎年、夏休みには帰郷する。今年もおよそ1ヶ月半にわたって日本で休暇を過ごした。こちらの学校では9月が新学期となるため、夏休みは年度休みでもあり、7月初めから8月いっぱいという長い夏季休暇が存在する。学年をまたぐ（担任やクラスも変わる）という行政上の理由も手伝ってか、夏休みの宿題などは全く存在しない。塾という場所も存在せず、習い事も基本的に学校と同じカレンダー（夏休み中は休み）で提供されているこの国では、子ども達は、やるべきことも行くべき場所も与えられない2ヶ月間を過ごすことになる。

一方、帰郷して気付かされるのは日本の親戚の子ども達や友人たちが、それはもうとても忙しそうに「夏休み」を過ごしていることだった。通う学習塾にはお盆休みさえないこと、スポーツ教室や部活動も毎日朝から夕方まで（ときには夜まで）びっしりとつまっているといった話を頻繁に聞かされた。加えて、夏休みは年々短くなっており、宿題はそれに反比例するように増えていっているというのが多くの親御さんの感触として聞かれた。サラリーマン生活の苦勞を聞いているかのような錯覚にさえ陥るこれらの話に、私は疑問を感じざるをえない心持ちになった。忙殺とも言えそうなこれらの経験は、子ども達にどのような幼少期を残すことになるのだろうか……。

英国の精神分析家である Adam Philips は、その著書 *On Kissing tickling and being bored* の中で、退屈 (Boredom) の重要性について書いている。彼の治療した11歳の男児は、毎日を多くの活動で埋め尽くし忙しく過ごしていた。セラピーでは、彼にとって退屈するとはどういうことなのかということが扱われていき、「忙しくすることは good (良い子) であろうとすることであり、退屈することは彼にとって自分の存在がわからなくなる恐怖体験である」ということが理解されていくことになる。Maria Popova は、本著の書評（下記アドレス参照）の中で、退屈するということは期待や予定という未来から自らを切り離すことであり、今ここでの自分がどうなのかということに注意を向ける行為であると書いて

いて、その難しさから、現代においていかに退屈が嫌われるようになったかを論じている。  
(<https://www.brainpickings.org/2014/06/19/adam-phillips-boredom/>)

このような傾向は、子どもだけでなく私たち大人の生き方にもそのまま通ずることであり、深く考えさせられる。

また Philips は同書の中で、退屈する力は「何が待っているか分からない中で待つことに持ちこたえられるようになる力」であり、幼少期にそれを育むことはその後の豊かな人生にとってかけがえのないことであると書いている。

日本でも共働きの核家族生活がスタンダードとなり、幼い子どもを一人で家に置いておくわけにいかない両親がさまざまなアクティビティーに参加させることで子どもの安全と生活を確保しようとする「背に腹かえられぬ」事情も、この子どもの忙しさの背景には大きく存在しているのを感じる。同時に、それはまさに忙しさの連鎖のようでもあり、親子そして家族にとっての「今ここ」が、子ども達の成長の軌跡が、素通りされていってしまう危険を秘めているようにも感じられる。

じゃあどうすれば良いのさ！とお叱りを受けてしまいそうだけれど。この複雑な夏の思いを、ここに記させてください。